ほぼ週刊コラム「Partnership論」　その６０

**公理系は、自然科学では所与「固定」だが社会科学では人々が選ぶべきもので「変更可能」だ。従って、自然科学では問題ごとに「解」の有無が固定的だが、社会科学では「公理系を変更しない限り解けない問題」や「公理系を変更すれば容易に解ける問題」が存在する。**

**（３）**

**「熟議型民主主義」も「経済民主主義」も導入できないで苦しむ日本政治経済への処方箋**

2013.09.13　齋藤旬（[www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp)）　rev.1

**「My motto – Unity in Diversity」、IOC新会長トーマス・バッハの就任挨拶。**おや、こんな所にもUni-versalismが出るのか、と思ったのでその話からする。9月10日、IOC（国際オリンピック委員会）の新委員長に決まったトーマス・バッハ氏の就任挨拶冒頭部分だ。

“I want to lead the IOC according to my motto – **unity in diversity.** 　I want to be a president for all of you," said Bach.

バッハ氏は59歳。前任のジャク・ロゲ氏を継いでIOC第９代会長となる。西ドイツ代表のフェンシング選手として1976年モントリオール五輪金メダルを獲得。弁護士資格を持つ。

バッハという名前からも想像できるが、彼は、チャキチャキの西欧人だ。Uni-versalismが骨の髄まで染み込んでいる。だから、これからオリンピックを統括していく決意の中心に「My motto – Unity in Diversity」が出るのはとても自然なことなのだろう。

**翻ってニッポン。2020年東京オリンピックが開催されることが決まった**。素直にそれは良いことだと思う。

私は現在56歳。東京生まれの東京育ち。1964年東京オリンピック当時、小学一年生だった私は、ブラウン管白黒テレビに映る開会式の上空に、「白黒の五輪」が描かれてゆくのを見て、思わず庭に飛び出した。そして直（じか）に、ブルーインパルス航空隊が真っ青な空に描いてゆく大きな大きな「五色の五輪」をこの目に焼き付けた。圧倒的な臨場感にただただ感動。今思い出しても胸が高鳴る。

そう、2020年東京オリンピック開催は良いことだ。しかし、「第四の矢」だと浮かれるのは頂けない。なぜなら･･･。

現在、ニッポンの経済・政治が置かれた状況はとても深刻だ。世界の経済・政治がそれぞれ「経済民主主義」「熟議型民主主義」へと移行していく中で、日本は旧時代の経済・政治を繰り返すばかり --- というより、「エッ、そんなものがあるのか」と、「経済民主主義」「熟議型民主主義」の存在自体をしっかりとは認識できていない。仕組みや根本原則（Uni-versalism）さえ分かっていない。ほとほと呆れる「情けない」状態だ。「第四の矢」と浮かれる向きには「貴方は西洋社会科学でそろそろ落第を食らいそうだよ」と諭したい。

**「第四の矢」でなく「蜘蛛の糸」**。ここは、「My motto – Unity in Diversity」と決意を表すバッハ氏を見習うべき「学びの場」--- いや、「死に物狂いの猛勉の場」が訪れたと覚悟を新たにすべき時だと思う。それは、お釈迦様がカンダタに与えた細い一本の蜘蛛の糸。「あわよくば極楽に行けるかも」と浮かれていると、蜘蛛の糸はプツンと切れてしまう。

そう、「第四の矢」では決してない。それはむしろ細い一本の「蜘蛛の糸」だ。助かるか助からないかは、我々の「覚悟のほど」「猛勉のほど」次第だ。

浮かれている場合ではない、というか、浮かれていれば「奈落」に落ちる。

**さて、この「公理系」シリーズのまとめをしよう**。といっても前回前々回で言いたいことはほとんど述べ終わっている。簡単に言えば、

「熟議型民主主義」も「経済民主主義」も導入できないで苦しむ日本政治経済への処方箋は、「uni-versalism導入」だ。

の主張。これが我ながらあまりにも「一点張り」というか断定的なので、今回は、本当に他の方策はないのか少し考えてみたい。

どういうことかというと、[コラム５６「Uni-versalismなくして民主主義なし」](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp/Column%20hobo-shuukan/2013/20130809%20W32%20san-in-sen%20so-katsu%20rev1/20130809%20W32%20san-in-sen%20so-katsu%20rev1.docx%22%20%5Ct%20%22_blank)に端的に表れているのだが、ここまで、「経済民主主義、熟議型民主主義は、uni-versalismが社会公理系に組み込まれていない限り実現できない」という立場で述べてきたが、本当にそうか。つまり、

1. この解、すなわち「経済民主主義、熟議型民主主義」を導くuni-versalismとは違う別の公理系は無いのか。
2. この解、すなわち「経済民主主義、熟議型民主主義」とは異なる「別解」は、この公理系（Uni-versalism）から導くことはできないのか。
3. この解、すなわち「経済民主主義、熟議型民主主義」とは異なる「別解」を導く、universalismとは異なる別公理系は無いのか。
4. （C）を今の日本に当てはめて考えてみる。つまり、日本の既存の社会公理系：「非個人主義」「無私の協業」「無私の平和」あるいは「公平、無私」から、何か「経済民主主義、熟議型民主主義」とは異なる「別解」は導けないのか。

･･･といったテーマについて、少し考察してみようと思う。

**･･･といった矢先にもう、「私では力不足」とギブアップしたい**。そもそも、（今までの所）地上最強の文明を生み出した西洋人が二千年かけてたどり着いた、というか練りに練って定着させた「解」と「公理系」だ。アジア・アフリカの新興国にさえ採用させた「解」と「公理系」だ[[1]](#footnote-1)。しかも、超弩級の天才 --- 天が与えた才能を超弩級に持つJesusの直観、すなわち、

**必要な「律法」は「神を愛し人を愛せ」の二つの原則から演繹的に全て導くことが出来る[[2]](#footnote-2)。**･･･という方針に沿って整備された「解」と「公理系」だ。このレベルのアイデアを新たに出すことなど、私にできるはずがない。超弩級の天才でないかぎり「別解」「別公理系」を見つけられるはずがない。

･･･ということで、(A) (B)(C) については早々とギブアップする。ただ、

1. 日本の既存の社会公理系：「非個人主義」「無私の協業」「無私の平和」あるいは「公平、無私」から、何か「経済民主主義、熟議型民主主義」とは異なる「別解」は導けないのか。

についてだけ、若干、考察することにする。

　**問い(D)に対する答えは「再鎖国」だが、21世紀国際社会ではそれは恐らく容認されない**。**しかし、読者の中には「スイスの様な永世中立国はどう？」と**思われる方もいらっしゃるかもしれないので、まずそれから考察し、その後「再鎖国」について考察しよう。

　永世中立国というのは、「他国vs.他国の戦争には参加しません。同盟関係はどの国とも結びません。また、自国が戦争に巻き込まれたときは他国からの応援は要りません。自国の軍隊だけで戦います。」ということであって、他国との経済的あるいは政治的やり取りは続けることを意味する。即ち、「国民皆兵による強力な軍隊」と「国際社会（国連）による承認」を必要とし、更に、国際政治経済社会と交流する為の基本常識・基本能力、すなわち現代においては、「universalism」「熟議型民主主義」「経済民主主義」に関する知識・能力を必要とする。

永世中立国スイスでは、日常生活において国民の多くが常に銃などの武器を携帯しているし、国民の8割弱がキリスト教徒であり「神を信じる」と答えている。従ってuniversalismに端を発する現代経済知識・能力は豊富だ。スイス金融業が世界の最先端を行っていることは、読者の皆さんは良く御存じだろう。永世中立国は、universalism音痴のニッポンが、とてもとても歯が立つようなシロモノではない。

　**それでは「再鎖国はどうよ？」**。結論から言うと、恐らく21世紀国際社会では「鎖国」は容認されないだろう。そもそも19世紀半ばには既に、鎖国は国際社会から許されない事柄になっていたのだ。ましてや、21世紀の現代においておや、だ。

　まず、地球温暖化や資源・エネルギーの枯渇や鳥インフルエンザ・パンデミックなど、全地球的な問題が頻発する中、日本だけが「そんなことは知りません」とは言えない状況だ。いわば、宇宙船「地球号」。全ての乗員は役目を果たさなければ、この宇宙船は立ちいかなくなる。役目を果たさない乗員は、この宇宙船「地球号」に搭乗する資格はない。トム・ゴドウィンのSF小説『冷たい方程式』（1954年）の様に、「宇宙服を着ないままで宇宙に放り出される」かもしれない。（冗談。笑）

　それでも、少子高齢化が進むニッポンは「もう一度、ガラパゴスの「閉鎖安定」環境を取り戻し、陸イグアナ・海イグアナの穏やかな生活に戻りたい。」と思う年代層が相対的に増えているかもしれない。そうすることこそ全地球的問題を解決できる[[3]](#footnote-3)、と思う人たちだ。

　しかし今は、インターネットという通信手段があり、更に、ジェット機で半日強で地球の裏側に行ける時代だ。アラブの春「ジャスミン革命」やウクライナ「オレンジ革命」ではないが、良い悪いは別にして、今まさに地球で起こっていることは、一瞬にして人々の知るところとなるし、参加できるところとなる。いくら「見ざる言わざる聞かざる」の体制を敷いても、「非平衡状態」地球の現在進行形の激動に参加したい、いや、参加しなければならないと思う人々は必ずいるはずだし、その「思い」は止めようがないだろう。

　それでもそれでも、ダメ元で「ニッポン再鎖国」を国際社会に提案したいという人はいるかもしれない。（実は、或る意味、私もその一人かもしれない。）･･･ということで、「日本政治経済への処方箋」に一応、「再鎖国」は残しておくことにしよう。

　**「一点張り」「断定的」な「処方箋」を修正すると以下の様になるだろう**。即ち、「熟議型民主主義」も「経済民主主義」も導入できないで苦しむ日本政治経済への処方箋は、以下の三つだ。それぞれ排他的に選択可能だ。つまりどれか一つで一応の「処方」となる。

1. 公理系：universalismの導入と、それから出発して「熟議型民主主義」「経済民主主義」へ演繹する「ポスト世俗の西洋社会科学」に関しての「猛勉」。
2. 超弩級天才が現れ、(1)とは異なる別公理and/or別解を発明してくれるのを待つ。
3. ダメ元で「ニッポン再鎖国」を国際社会に提案する。

**日本人全てが良く考えなければならない問題だ**。･･･が、勿論私としては(1)を、基本的には、お勧めする。「基本的には」の意味はオイオイ分かって頂く。

(2)は「望み薄（うす）」だ。アベノミクスに関しては、それはカンフル剤としての効果はあるが、根本治療の「解」ではないと、私は考えている。

それでもどうしても(2)に賭けてみたいという向きには、「タイムリミットを設けるべき」とアドバイスしたい。(1)という一応上手く機能する公理系と解が既に分かっているのだから、もし(2)に賭けてみるならタイムリミットを設けるべきだ。日本は、国の借金が1000兆円を超えてどんどん膨らんでいる。この借金が、個人金融総資産1500兆円を超えるのはあと4-5年か、と言われている。アベノミクスのカンフル効果を考慮に入れても「あと6-7年」といったところだろう。借金が資産を超える、いわゆる「債務超過」になる前に、(1)に乗り出すべきだ。「もう少し考える」にしても長くはできない。「債務超過」つまり「破産」に至るまでに、私達に残された時間はそう長くない。

(3)に関しては、脚注3でも述べたが、「一理ある」と私は考えている。「一理」どころか、或る意味、私は(3)は「すべき事」と考えている。どういうことかというと･･･。日本の社会公理系である「非個人主義」と、それによる「無私の協業」「無私の平和」は世界に誇るべきものだ。過去のコラムでも何度か述べたが、一万年後、ようやっと世界が到達する「平衡状態」を、日本は世界のどの国よりも先駆けて実現したのだと思う。

そのこと、つまり「日本社会こそ世界がお手本とすべき究極の平和で豊かな社会なんだ」と言うことを世界に訴えた上で、「でも、しょうがねー、世のため人のため、いっちょ、やったるか」と、全地球的問題が山積みの今の世界に飛び込む。つまり、(1)の「猛勉」を開始する、ってのが「日本人の心意気」ってもんだろうと思う。そう、「和」の心はしっかりと土台に持ったまま、universalismも自家薬籠中のものとする。「無私の協業」「無私の平和」と「有私の協業」「有私の平和」との両刀遣いとなる。日本と世界の両方の、平和と豊かさに貢献できる日本人となる。これが、私がお勧めする「日本政治経済への処方箋」だ。

**ちょうど7年後、2020年に東京オリンピックが開催されることになった**。先ほど述べたように、我々に残された「もう少し考える」時間も同じく最長で7年だ。この、これからの7年の間に、日本人全員が「日本政治経済への処方箋」の問題に関して思いを致し考えを深め、日本人全員が「決断」をし「行動」をとらなければならない。

それが出来ればきっと、2020年東京オリンピックでは、世界中の人達から大きな「賞賛」「ありがとう」の声が、日本人に対して寄せられていることだろう。

そうなった暁に、「蜘蛛の糸」でなく「第四の矢」だったと2020年東京オリンピックのことを振り返ることが出来るのだと思う。

　今週は以上。来週も乞うご期待。

1. [コラム９の『諸外国で大流行の憲法リフォーム、「普遍と多様」の組込み』](http://www.llc.ip.rcast.u-tokyo.ac.jp/Column%20hobo-shuukan/2012/20120827%20W34%20large%20scale%20reforms%20of%20constitutions.rtf)、参照方。 [↑](#footnote-ref-1)
2. 新約聖書、マルコによる福音（マルコ12・28b-34）参照方。モーセ以来の律法（ユダヤ教宗教法）を次々と破る様な行動をとるJesusに対し、ユダヤのファリサイ派律法学者が少し意地悪く「ではJesus先生、何が一番大事な律法ですか？」と尋ねる。その問いにJesusが答える箇所。読者はもうお分かりだと思うが、この「神を愛し人を愛せ」こそ、universalismの同値変形命題である、「人間の尊厳 & 共通善の存在」やsubsidiarity & solidarityの、「起源」「淵源」「原型」だ。 [↑](#footnote-ref-2)
3. この考えは一理あると思う。全地球がガラパゴス「閉鎖安定」環境であれば、地球温暖化や資源・エネルギーの枯渇や鳥インフルエンザ・パンデミックなどの全地球的な問題は起こらなくなるだろう。しかし、何度も言うようだが、現在の地球はdiversityに満ちた「非平衡状態」だ。全地球が「閉鎖安定」環境、即ち「平衡状態」に達するには恐らく一万年くらいかかるだろう。 [↑](#footnote-ref-3)